

## 特集「美術館・博物館の色と光」

Special Issue: Color and Lights of Museums

## 特集によせて

Editor's Introduction

鈴木 卓治

Takuzi Suzuki

国立歴史民俗博物館

National Museum of Japanese History

室屋 泰三

Taizo Muroya

国立新美術館

The National Art Center, Tokyo

本特集では、「美術館・博物館の色と光」と題して、色と光にまつわる美術館・博物館の日々の営み、あるいは挑戦について紹介する。本特集は4つの記事から構成される。

「色で時代を映し出す ヤマザキマザック美術館の展示室」(坂上)は、名古屋市にあるヤマザキマザック美術館における展示室の設計デザインについて述べている。工作機器メーカーとして著名なヤマザキマザックの2代目社長である山崎照幸(1929～2011)が収集した“フランス美術300年の流れを一望する”絵画コレクションを公開するために2010年に創設されたヤマザキマザック美術館は、コレクションの特色を生かすため、「赤の間」(18世紀)、「黄の間」(19世紀)、「青の間」(20世紀)の内装に、赤、黄、青の色彩を象徴的に用いていること、また、アール・ヌーヴォーの展示室では緑を有効に利用していることが示される。

「クルマと色とミュージアム」(布垣)は、筆者が元館長を務めたトヨタ博物館(愛知県長久手市)ならびに現在館長を務めている富士モータースポーツミュージアム(静岡県小山町)についての記事である。トヨタ博物館では、2016～2017年に実施された常設展示改装において、床の色・質感を変えることが重要な改装ポイントであったこと、それは車のボディの色・質感の歴史に深く関わっていること、および、ポスターや錦絵を美しく見せるためのクルマ文化資料室の色彩設計について紹介される。また、富士モータースポーツミュージアムにおいては、原色のクルマが引き立つ展示室とするために、白およびモノトーンを貴重とし、建材の素材感を生かした空間構成を行ったこと、対照的に受付や休憩スペース等の人間が触れる部分には、ベージュ、若葉色、イエローなどの温かみを感じる色彩・素材を用いたこと、が紹介される。

「ポーラ美術館「カラーズ」展に見られる新しい色彩観の展開」(三木)は、2024～2025年にポーラ美術館(神奈川県箱根町)において開催された展覧会「カラーズ—色の秘密にせまる 印象派から現代ア—

トへ」の紹介を通して、「Color」という西洋近代の概念を前提とする色彩観を再考し、環境・質感認知・素材といったローカリティと結びついた新たな色彩観の展開としての「カラーズ」展の位置づけを試みている。筆者は、これまでに色彩論と美術館制度はいずれも西洋近代の「Color」概念を土台として成立してきたこと、近年「Color」概念は著しく拡大しており、人々の感覚を均質化させていること、「カラーズ」展では、環境・素材・質感認知・地域文化と再び結びつき、世界の人々と共有可能な概念として「Color」を再構築しようとするアーティストの営みが示されたこと、それは従来の美術館でも、西洋由来の色彩論でも収まらない部分を含んでおり、色彩論と美術館の大きな課題となること、を指摘している。

「歴博色尽くし」展における日本色彩学会とのコラボレーションについて(鈴木・國本・日高)は、国立歴史民俗博物館で2024年に開催された企画展示「歴博色尽くし」における、博物館と色彩研究者・日本色彩学会とのコラボレーションについての報告記事である。特徴的な「いろ・つや・かたち」をもつ館蔵資料を取り上げ、歴史学・考古学・民俗学・自然科学の観点から展示・解説を行い、色と人間とのかかわりについて考える展示として設計されたこと、コラム展示「明治初年の色彩教育」において、明治初期の色図による色彩教育とその挫折を取り上げるにあたり、色彩研究者の監修を仰いだこと、関連企画として色彩文化体験コーナー「いろどりみどり」を設け、色彩研究者ならびに日本色彩学会関東支部有志の協力を仰いだこと、が紹介される。

ICTによる仮想現実化がすすむ現代社会にあっても、美術館・博物館の展示が人びとに働きかける「まことの感覚」、あるいはその存在を信じ追い求める人間の旅は、終わりそうにないし、終わってほしくない。色彩の魅力を深く知る本学会の会員にこそ、いまこそ美術館を!博物館を!と呼びかけたい。

特集「美術館・博物館の色と光」  
Special Issue: Color and Lights of Museums

色で時代を映し出す ヤマザキマザック美術館の展示室  
Galleries in the Yamazaki Mazak Museum of Art: Reflecting the Times Through Colors

坂上 しのぶ      ヤマザキマザック美術館  
Shinobu Sakagami      The Yamazaki Mazak Museum of Art

キーワード：建築，アート，内装デザイン，美術館  
Keywords : architecture, art, interior design, art museum

### 1. はじめに

ヤマザキマザック美術館は、工作機械メーカー「ヤマザキマザック株式会社」前会長で初代館長の山崎照幸（1928-2011）が収集したフランス美術 300 年の流れを一望するコレクションを公開する美術館として、2010 年 4 月に開館した。名古屋市中心部に建つ、白く無機質なキューブ状の建造物が当館で、中に入ると天井から差し込む太陽光が 1F ロビーの白い空間を明るく照らし出している。21 世紀の都市型美術館とし



て構想されたもので、5 階建の建物の 5F と 4F が展示室となっている。

### 2. コレクション紹介

#### (1) フランス美術 300 年を一望する絵画

5F 絵画の展示室は、18 世紀フランス宮廷に花開いたロココ芸術から、ロマン主義、新古典主義、モネやシスレーに代表される印象派、モディリアーニやピカソなどエコール・ド・パリ等の 20 世紀美術まで、3 世紀にわたるフランス絵画の流れを時代を追って紹介する。

#### (2) 19 世紀末アール・ヌーヴォーの美術工芸品

4F 展示室では、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパを中心に世界規模で広がった新しい芸術運動「アール・ヌーヴォー」を紹介する。自然が持つ有機的な曲線美をデザインに取り込んだ家具やガラス作品を展示している。

### 3. 展示室紹介

#### (1) 5F 赤の間～

優美な内装空間でゆとりのひとときを



## 特集「美術館・博物館の色と光」 Special Issue: Color and Lights of Museums

### クルマと色とミュージアム Cars, Colors, and Museums

布垣 直昭

Naoaki Nunogaki

富士モータースポーツミュージアム／トヨタ博物館

Fuji Motorsports Museum / Toyota Automobile Museum

キーワード：トヨタ博物館, 富士モータースポーツミュージアム, クルマと色, 展示室の床と壁面, 人の記憶と色

Keywords: Toyota Automobile Museum, Fuji Motorsports Museum,  
Car and Color, Floor and Wall of Exhibition Rooms, Color and Memories

#### 1. はじめに

ミュージアムと色彩というテーマについて、私の約10年間のミュージアム関係の仕事の中から二つのミュージアムでの展示の色彩計画について紹介させていただきたい。まずトヨタ博物館常設展示改装と2019年設置「クルマ文化資料室」のカラー計画。そして2022年10月に開業した「富士モータースポーツミュージアム」の全体展示カラー計画についてご紹介したい。ご参考までに、その中で私の役割は、博物館館長かつ学芸員としての展示全般の企画と歴史考証、そしてミュージアム着任以前の約30年間のカーデザイナーとしてのキャリアを活かした展示デザインのプロデュースの2つの役割りであった。

一方この二つのミュージアムは共にクルマの歴史を展示するミュージアムであり、主役はクルマそのものである。約130年にわたる自動車の歴史の中で、クルマのカラーリングや素材使いの変遷についてもご紹介できればと思う。

#### 2. トヨタ博物館編

##### ～ (量産車の歴史とクルマ文化展示) ～

トヨタ博物館は1989年に設立され、世界の自動車の130年の歴史を、約150台のクルマや、関連資料の展示で伝えている。自動車の進化としての変遷もあるが、時代の社会的要因や流行の影響も受けており、クルマのカラーリングは時代性も反映している。

ミュージアムの色彩計画の話の前に、まずはその変遷を時代を追って紹介したいと思う。

#### ■展示車に見る自動車黎明期の色にまつわるエピソード

当館で自動車の歴史の始まりは、1886年のベンツ

の特許車から紹介している。19世紀末から20世紀初頭にかけての自動車の黎明期は、まだ馬車に動力をつけたような形態であり、クルマ独自のカラーリングとは言えない時期であった。それが大きな変革を迎える事になったのが、1908年のT型フォードの登場に端を発する自動車の大量生産時代の到来である。それまでは一部の富裕層の乗り物だったが、ヘンリー・フォードが考案したチェーンコンベアによる流れ作業の量産システムは、自動車の価格を1/3にまで抑えるようになり、一気に大衆車への道を切り開いた。大衆車は人やモノの移動に変革をもたらし、社会を変えるほど大成功を収める事になるのだが、それはまた、色の失敗にもつながっていった。

19年間製造されたT型フォードに、究極のコストダウンを求め続けたヘンリー・フォードは、ついにその色を「黒」だけにしてしまったのだ。その理由は、当時の塗料では黒が最も乾燥が早く、製造時間の短縮にもつながったからだと言われるが、当時世界で圧倒



写真1 1914年式、黒いT型フォード

**特集「美術館・博物館の色と光」**  
Special Issue: Color and Lights of Museums**ポーラ美術館「カラーズ」展にみる新しい色彩観の展開**

New Developments in the Views of Color Seen in the Pola Museum of Art Exhibition "The Secrets of Color"

**三木 学**

Manabu Miki

株式会社ビジョナリスト

Visionarist Co., Ltd.

キーワード：色, 美術館, 環境, コスモロジー

Keywords : Color, Museum, Environment, Cosmology

**1. はじめに**

2024年12月1日から2025年5月18日まで、ポーラ美術館において「カラーズ — 色の秘密にせまる印象派から現代アートへ」展が開催された。筆者は、展覧会図録への寄稿と2つのトークイベントを担当した。色彩をテーマに近代から現代までの作品を概観する展覧会で、美術史と色彩史の深い結び付きを体感できた。アイザック・ニュートンの『光学』(1704年)に倣って、プリズムをポラロイドカメラで撮影した杉本博司の「Opticks」シリーズをプロローグとし、第一部「光と色の実験」、第二部「色彩の現在」という構成であった。なかでも第二部は、日本の若いアーティストや美術工芸の作家、ファッションデザイナーなども含まれていた点に独自性があった。本稿では、「Color」という西洋近代の概念を前提とする色彩観を再考し、環境・質感認知・素材といったローカリティと結びついた新たな色彩観の展開として「カラーズ」展を位置づけたい。

**2. 美術館コレクションにおける光と色**

もともとポーラ美術館は印象派をはじめとした西洋近代絵画や日本の近代絵画のコレクションを基礎としてきた。近年、それらの要素を発展させる形で、現代アートのコレクションも充実させている。ゲルハルト・リヒターやフェリックス・ゴンザレス＝トレスなどの作品の購入が話題となったのは記憶に新しい。過去と現在の系譜、文脈をつなぐ意味で重要な鍵となるのが「色」である。この点については、近年日本にも巡回されたテート美術館のコレクション展のテーマが「光」であったことを想起させられる<sup>1</sup>。それは実質的に「光と色」の展覧会と言えるものだった。テート美術館のコレクション展においてはターナーや印象派を起点と

し、西洋近代の「Color」の系譜を展開していた。

印象派は世界中で絶大な人気があり、動員が見込める。しかし、印象派以降となるとゴッホ、ピカソ、マティスといった著名なアーティストがいるが、戦後の前衛美術や今日の現代アートで日本の観客に人気のあるアーティストは限られている。その理由としては、戦後は絵画や彫刻といった古典的な形式とは異なる様々な媒体や形式が模索されたり、今日では社会的な問題をテーマに扱ったりすることが主流となり、難解な表現になっているということもあるだろう。

その中で、光と色は、今日でもモチーフにしているアーティストが多く、印象派からの系譜をつなぐことができるテーマでもあるのだ。しかし、「Color」というテーマを考えたとき、世界共通の概念として捉えていいのかという問題はある。「Color」は西洋の中で発展してきた感覚や概念であり、非西洋諸国や日本の色という感覚や概念と完全に重なるわけではない。非西洋諸国のアーティストの色彩表現の個性は、西洋的感覚や概念と逸脱しているところにあることが多いのだ。そうすると、西洋中心のテート美術館コレクション展のように、「同一文化圏における色彩表現の多様さ」としては説明しきれない。

**3. 西洋のコスモロジーの解体と新たな色の概念形成**

西洋の中で、今日の「Color」という概念は、ニュートンの光学研究がある種の「コペルニクス的転回」を促した。もちろんニュートンの光学研究も望遠鏡の色被りの改良の延長線上にあり、ガリレオやケプラーの望遠鏡の発展史を継承している。また、それらはカメラ・オブスクラ(レンズのついた暗箱)のようなデッサンの補助器具の開発とも並行しており、レンズの研磨技術の発展が世界の認識を大きく変えていった。そ

## 特集「美術館・博物館の色と光」 Special Issue: Color and Light of Museums

### 「歴博色尽くし」展における日本色彩学会との コラボレーションについて

Collaboration with the Color Science Association of Japan for the Special Exhibition "The Museum Collection: Color and Quality" at the National Museum of Japanese History

鈴木 卓治  
Takuzi Suzuki

国立歴史民俗博物館  
National Museum of Japanese History

國本 学史  
Norifumi Kunimoto

慶応義塾大学  
Keio University

日高 杏子  
Kyoko Hidaka

女子美術大学  
Joshi University of Art and Design

キーワード：コラボレーション, 色図, 色彩教育, いろどりみどり, 縹綯彩色, ライブ配信

Keywords : Collaboration, Color Chart, Color Education, IRODORI MIDORI, UNGEN Coloring, Live Streaming

#### 1. はじめに

国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市；以下、歴博）は、2024年3月12日から5月6日まで、企画展示「歴博色尽くし」<sup>1)</sup>（図1、以下、本展示）を開催し、筆者の一人（鈴木）が展示代表を務めた。本展示は、日本色彩学会にご後援を賜ったほか、共同筆者である國本、日高両氏ならびに関東支部のみなさまに、展示コーナーや関連イベントの企画立案ならびに実施にご協力いただいた経緯があり、今回本特集にてご紹介させていただきご縁を得たことは大変光栄である。博物館と学会の有機的なコラボレーション事例の報告としたい。

なお、各章の執筆者は下記の通りである；1、2、5章：鈴木、3章：國本、4章：日高。

#### 2. 「歴博色尽くし」展について

本展示は、「色」をテーマとした館蔵資料展である。



図1 「歴博色尽くし」展

ここでは「色」という言葉を大きな意味でとらえ、赤、黄、青…などといった「いろ」にとどまらず、素材のもつ質感や微細な構造がかもす「つや」、そしてそれらの組み合わせがつくる「かたち」までを含めることし、特徴的な「いろ・つや・かたち」をもつ館蔵資料を取り上げ、歴史学・考古学・民俗学・自然科学の観点から展示・解説を行い、色と人間とのかかわりについて考える展示とした。以下、展示構成について、展示解説シートより引用する（原文ママ）。

#### コーナー1 2棟の建築彩色模型～あなたがたはなぜ、歴博に？～

彩色された文化財建造物には、劣化や剥落が進んだものも多く、その全貌を窺い知ることは困難です。当時の絢爛豪華な彩色を復原するため、先達たちが検討を重ね、実物大の彩色模型を作り上げました。ここでは、京都の醍醐寺五重塔初層の彩色復元模型と平等院鳳凰堂の天井を支える組物を部分的に復元した模型を展示します。実際の建造物では見ることのできない色をご覧ください。

#### コーナー2 身にまとう色～染織工芸の色と模様～

**着物注文のための見本—男物・女物の違い** 着物の注文では、男性用と女性用とでは、色見本には違いがあります。男性用が純粋に色見本であるのに対し、女性用では、色とともに模様を併せた総合的な意匠の見本となっています。色とともに男女間の相違を見てください。

**考古利今—今に伝わる上代裂** 上代裂（じょうだいがれ）とは、飛鳥時代から奈良時代の染織品を包括して呼ぶ名称です。明治政府が新製品の開発に古物を活